特集

がん治療と統合医療

がんに想うこと　つれづれなるままに

藤沼 秀光　藤沼医院 院長

『風の時代』

これまで貴誌には創刊以来お世話になり、寄稿とインタビュー含めて10回の掲載をいただいております。その間に、がんに対する人々のとらえ方も多様化しているようです。

今まさに世の中は２０２０年12月22日から占星術でいうところの、これまでの『土の時代』から『風の時代』に移り変わり、それが今後約２００年間続いてゆくといいます。『土の時代』は過去２００年に亘った物質やお金、権威や組織・集団など、物を主体にした物主の時代で、これは奇しくも産業革命から始まって、２００年続き今終焉を迎えています。

これからは物質的な豊かさに頼らず、財産や地位にとらわれず、情報や知識、コミュニケーションなど個人を主体にした権威や物に囚われない自由な『風の時代』に入ってゆきます。

ここで「占星術などは非科学的で単なる占いではないか！」と思われる方も多いと思います。しかし、元々占星術は古代メソポタミアの天文学に端を発しており、現存するホロスコープ（天体の配置図）は、なんと紀元前２７６７年７月16日のものであり、星や天体の運行と国家や人々の命運・世相や天災との関連を探り、統計的に体系づけてきた学問（Astrology）といえます。

ところが紀元１５４３年のコペルニクスの『天球の回転について』地動説により天文学（Astronomy）が現れ、袂を分かつことになります。しかしながら、天動説も地動説もどちらの視点で観測するかの違いのみであり、Astrology とい

う学問の体系に変わりはないはずです。

私の出生時と場所から導き出されたネイタルチャート（天体の配置図）**図1**では、驚くべきことに家庭環境、性質や性格、人生の目的などが発達年齢域ごとに今後の自分さえも読み進めることが出来るのです。しかも誰が行っても同じ答えが現れます。私のMC（人生の目標）は「ピラミッドとスフィンクス」〝古代からある知識、同じ考えの人たちと共同で研究し、自分の見解を証明する証の人〟と示されました。妙に納得しました。

このようにこれからは『風の時代』であり、今回はがんや疾病について日ごろ思っていること、行っていることをつれづれなるままにつづってみたいと思います。私個人の経験であり、成書やエビデンスに基づいているものではありません。どうか『風』に免じてお赦しください。

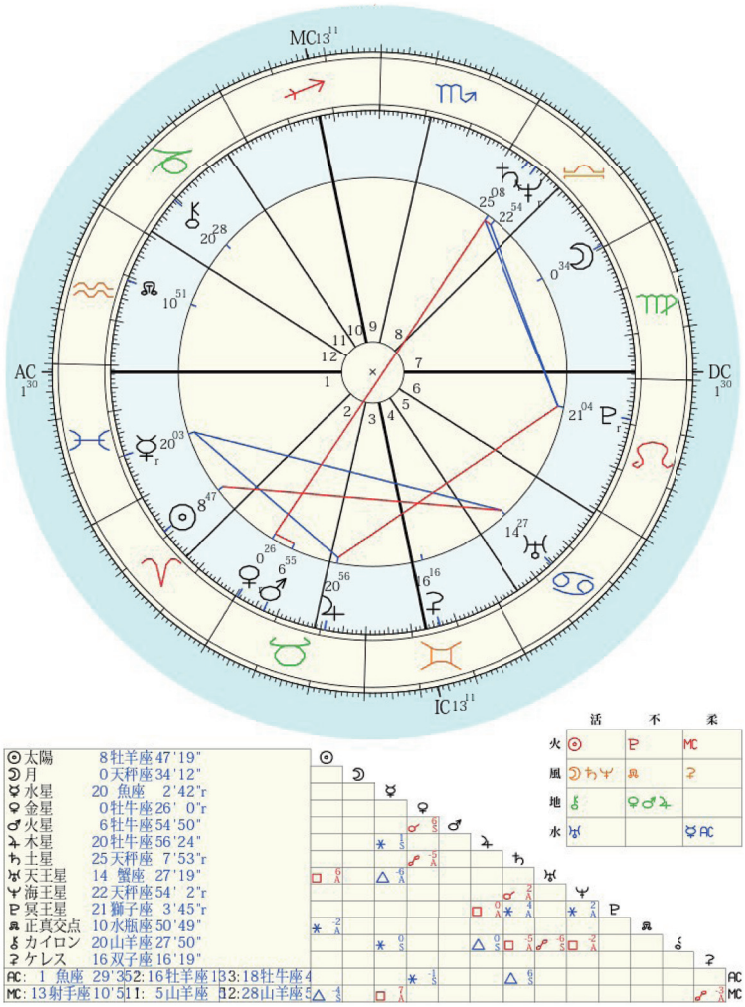

図1

Oさんと狸の霊障

今から43年前の私が研修医の時です。入院してきた60代の男性Oさんを受け持ちました。急性の精神病を発症し錯乱状態で、意思の疎通はなく夜間はせん妄状態で大きな唸り声を上げて眠りません。奥さんの話ではある日、自宅の前の道路で狸が車に轢かれて死んでいたので、夫は自宅に持ち帰り剝製にして玄関に飾ったといいます。そのあとから急に夫の様子が急変し、地元の病院を通して紹介入院になったのです。その後Oさんの精神状態（暴言・せん妄など）は改善せず、次第に自発性も低下して食事も摂れなくなり鼻からの経管栄養で寝たきりの状態になっていきました。

その間に主治医も何人か変わり数年が経ったある日、新人の主治医が経管栄養のチューブを交換するとき、胃ではなく誤って気管支に挿入してしまったのです。気道反射も低下していたのでしょう、咳やむせる反応もありませんでした。そのあと流動食が注入されたのです。食事中の誤嚥どころではありません。強制的に流動食が気管支に流し込まれたのですからたまりません。自発性のほとんどないOさんですが、さすがにもがき苦しみました。そして自らチューブを抜去してこう叫んだのです。「何やってんだぁ、苦しいじゃないか！」と。なんと、その瞬間から発病前のOさんに戻ってしまったのです。精神疾患から認知症に移行して不可逆的と考えられていましたから主治医も理解不能です。さらに不可解なことにそれまでの数年間の入院生活の記憶はまったく残っていませんでした。

Oさんは肺炎を治療して無事退院することができました。発症前に狸の剝製を玄関に飾ったことは医療者の誰にも伝わっていないようでした。私は、狐憑きというのは聞いたことがあるが、狸憑きというのは聞いたことがないなあ、そういえばOさんは狸腹だったなあと思いを巡らせました。この世に霊や魂が人間に作用して、がんも含め発病することはありうるのかもしれません。

ヒトは肉体のみで存在するのではなく、その上に心があり肉体を支配しています。『病は氣から』はそのことを言い得ています。では、もし魂があると仮定したら『氣は魂から』と規定されるでしょう。もちろん相互関係はあるでしょうが、原則として、魂は心の上に位置するでしょう。

Oさんの例では狸の魂がOさんの心を支配して肉体を発病させたと考えられます。この時あまりの肉体的苦痛がOさんの心を苦しめ、その苦痛は狸の魂にまで逆行し、それに耐えかねて狸は離脱し、Oさんは本来の自分を取り戻したと考えられます。

この事例は逆行的で甚だ荒療治ですが、もし魂を諭したり浄化したりすることができれば、順行的に穏やかな肉体の治癒がなされることでしょう。

不思議な臨終のはなし

私には苦い経験があります。昭和59年、歯科医である叔父が食後の胃部不快を訴え、当時私が勤務していた大学病院で胃透視を行いました。結果は血液検査も含め異常なしでした。胃薬だけで様子を見ていたのですが、しばらく経ったある晩、突然腸閉塞をおこし順天堂大学病院に救急入院となりました。緊急開腹手術が行われた結果、膵臓がんの腹膜播種と判明しました。手の施しようもなく、そのままお腹を閉じました。もっと詳しく検査をしておけばと悔やまれてなりませんでした。

次第に腹水も溜まるようになり、経口摂取も困難になりＩＶＨ（中心静脈栄養）のみになりましたが、衰弱は進行し悪液質を呈し、ついに昏睡におちいりました。担当医から明日までは無理でしょうと宣告され、私は夜中に駆けつけました。

反応はまったくなく、下顎呼吸でしかもたびたび呼吸は停止し、死期が迫っているのは誰が見ても明らかでした。「肉体を救うことはできなかった、しかし魂が救われれば……」との思いで私は叔父の眉間にむけて手をかざしました（セラピューティックタッチ）。30分ほどしたでしょうか、しかし反応はまったくなく、臨終が近づいているのがひしひしと感じられ、翌日は外来の勤務がありましたので後ろ髪を引かれる思いで病室を後にしたのです。

午後、再び病室を訪れた私は、わが目を疑いました。そこにはベッドに座り新聞を開いている叔父の姿がありました。しかも話をしているのです。自分の葬儀に関することなどを書き記し、まるで死を達観しているような振る舞いでした。早朝、診察にきた主治医はキツネにつままれたような顔をして、なにも言わずに出て行ってしまったそうです。

その後の容態はみるみる回復、流動食、お粥も摂れるようになり、ＩＶＨもはずれ、病室内を歩けるようになったのです。それまで腹腔いっぱいに拡がっていたがんによる痛みも腹水も嘘のように消え、穏やかな日々が続きました。

それからちょうど3週間たった日のことです。叔父は呼吸を大きく3回し、目をつぶり眠るように息を引き取ったのでした。苦しみのない安らかな状態で、あの世に逝くことができたのです。

その年の秋、今度は祖母の臨終に立ち会うことになります。胃がんの手術後回復することなく、坂を転げ落ちるように容態の悪化した祖母を私は東京のがんセンターから自宅に引き取りました。術前は通常の生活を送っていた祖母でしたが、嚥下時のつかえを精査した結果、噴門部がんだったのです。それがあと2～3日の命と宣告されてしまったのです。

自宅の一番上座、床の間のある和室に寝かせましたが、私がしてあげられる医学的処置はなにもありませんでした。「ただ孫として祖母の魂を救いたい……」という一心で、私は祖母の辛かったところに手をかざしはじめました（セラピューティックタッチ）。仕事の合間を縫って時間の許す限り祖母に付き添い三日三晩が経過し、祖母は黒いすすのようなものを胃から吐き続けました。しかし、その間も不思議と苦しむ様子はありませんでした。私は祖母の眉間に手をかざし続け、そのまま汐が引くような穏やかで静かな最期を見

送ったのです。医師としては後悔の念を拭えませんでしたが、孫としては何故か思い残すことはありませんでした。

自宅葬が行われましたが、弔問に訪れる人々は皆、驚きの表情を隠せませんでした。それは75歳の祖母の顔が、誰がどう見ても40歳前にしか見えなかったからです。実に35歳以上は若返ったことになります。

実は祖父は40歳で先立っておりました。もしあの世というものがあるとすれば、祖母は三途の川を渡り、40歳の夫に再会するはずです。75歳になった自分を夫に見せたくなかったのでしょうか……。私は2人の35年振りのあの世での再会を想像し、微笑ましく思い、これでよかったのだと自分に言い聞かせるのでした。

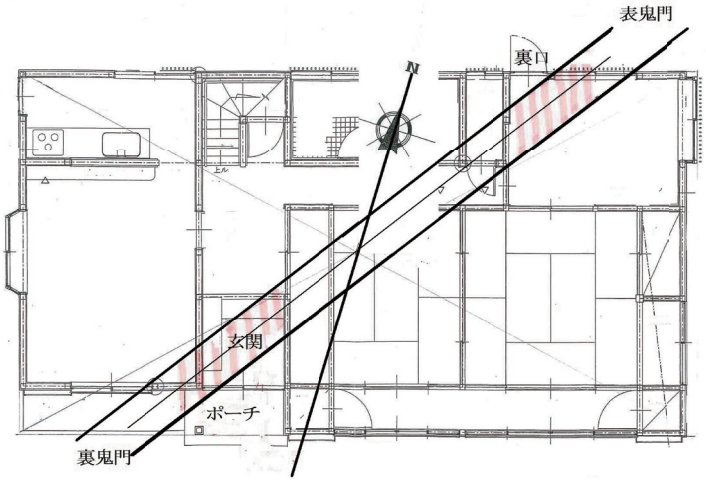

図2

鬼門と疾患の関係

歴史学的にいえば、日本の鬼門は日本の古神道と古代中国の風水とが混合して生まれたものと言われています。日本列島の東北に鎮座する丑寅の金神から、その妃神の鎮まる南西に向かって強い清浄のエネルギーが絶えず流れています。その流れを鬼門と呼びトイレや玄関、仏壇などが当たると強烈なクリーニング現象が引き起こされます。一生かけて清浄にするところを2～3年で浄める現象が起きますから、命を落としたり、倒産や破産などを引き起こします。

鬼門の作図法は種々ありますが、私が行うのはまず家の重心位置を決め、そこを起点にして磁北と緯度による偏差＋36度で鬼門のラインを決定します。そのラインを中心線として幅92㎝が鬼門のベルトになります。鬼門ベルト上に仏壇があれば先祖はあまりのクリーニングに耐え切れなくなり子孫にさまざまな出来事を示し病気にすることもあります。

図2は私の講演で鬼門に関する質問をされたOさんの自宅の平面図です。表鬼門から裏鬼門へと鬼門ベルトが清浄の氣をもって流れています。裏口はかろうじて鬼門ベルトが外れていますが、玄関の左側の引き戸が鬼門ベルトに掛かっています。そのため清浄化現象を避けるため左側は固定して右の引き戸から出入りするように助言しました。奇しくもOさんは30年ほど前にもある髭のお爺さんから同じ事を言われており、さもありなんと頷きました。

ある30代の男性です。突然末期の肺がんを宣告され、当院に相談に来られました。私は不自然な病気の発症や難病・精神疾患の方には、家の見取り図を持参していただくことがあります。この方は、最近自宅を増築して母屋と渡り廊下で繋げたため、鬼門ベルトが母屋の玄関に架かってしまったのです。玄関をずらす工事は大ごとになりますから、渡り廊下を切り離すよう再三提案しました。しかし信じてもらえず、やがて命を落とされました。

この例のように、がんではなくとも精神疾患や難治性の皮膚病、多発する事故などの事例を多数経験しまた解決もしています。

考察

これらさまざまな事例から人は霊・心・体で成り立ち、それぞれに及ぼす原因があることで発病するようです。がんやさまざまな疾患は、それ自体つらいことではありますが、人生全体として捉えますと清浄化の役割も担っているとも考えられます。

がんを闇雲に恐れたり、敵対視したりせずに、その深い意味に目を向けることも大切だと思う今日この頃です。